

エイズ教育をととした住民参加による地域保健システム形成への協力事業

1 . 事業概要	2
2 . 事業報告	2
2 - 1 . 村の保健リーダーを対象としたエイズトレーニング	2
2 - 1 - 1 . 目的	2
2 - 1 - 2 . トレーニングの実施	3
2 - 1 - 3 . トレーニング内容と参加者の反応	3
2 - 2 . エイズ啓発ワークショップ : 小学校役員対象ワークショップ	5
2 - 2 - 1 . ワークショップの目的	5
2 - 2 - 2 . ワークショップの実施	5
2 - 2 - 3 . ワークショップの内容	5
2 - 2 - 4 . ワークショップでの合意事項	5
2 - 3 . エイズ啓発ワークショップ : 一般教員対象エイズトレーニング	6
2 - 3 - 1 . トレーニングの目的	6
2 - 3 - 2 . トレーニングの実施	6
2 - 3 - 3 . トレーニングの内容	6
2 - 4 . エイズ啓発ワークショップ : 小学校におけるエイズ啓発ワークショップ	7
2 - 4 - 1 . ワークショップの目的	7
2 - 4 - 2 . ワークショップの実施	7
2 - 4 - 3 . ワークショップの内容	8
2 - 5 . コンドーム実演者トレーニング (自主事業)	9
2 - 5 - 1 . トレーニングの背景	9
2 - 5 - 1 . トレーニングの概要	10
2 - 5 - 2 . トレーニングの目的	10
2 - 5 - 3 . トレーニング内容	11
2 - 5 - 4 . コンドームに関する地域の状況、考え方	11
2 - 5 - 5 . コンドームにまつわる誤解	12
3 . 今後の課題	12

1．事業概要

申請事業対象地域であるムインギ県ムイ郡に隣接し、ムイ郡と同じカンバ人が居住し生活形態や文化・社会状況が類似しているヌー郡で当会が実施した調査から、同地域ではヒト免疫不全ウイルス(HIV)感染と後天性免疫不全症候群(エイズ)発症が拡大する中で、コンドームを含むエイズに関する知識が不正確であったり、エイズと伝統呪術と関連付ける意識が根強かったり、コンドームが浸透しないなかで実質的に複数の性的パートナーをもつ習慣が続けられていたりすることが明らかになっている。

当会は、ムイ郡においては、村での保健活動を担うことを期待して一般住民への基礎保健トレーニング、村で助産を実践している伝統助産婦への能力向上トレーニング、村の幼稚園で日常的に子どもに接している幼稚園教師への保健トレーニングを実施し、これら人材を「村の保健リーダー」として地域のプライマリ・ヘルスケア(PHC)システムを構築することをめざしてきた。これらトレーニングのなかでの参加者の発言から、ヌー郡でのエイズ調査で確認されたものと同様のエイズ問題がムイ郡にも存在していることが確認された。

これらムイ郡でのエイズ問題に対し、まず、当会が PHC システムの中間層と位置づけている「村の保健リーダー」すなわち伝統助産婦・幼稚園教師・基礎保健トレーニング修了者へのエイズトレーニングを実施する。これまで「村の保健リーダー」を中核として地域に根ざした PHC システム構築のなかでめざしてきた地域保健問題への対応の中に、エイズ問題への対応も中核的かつ日常的な課題として取り入れていくことをめざす。さらに、小学校を会場として、一般の住民へのエイズ啓発ワークショップを実施する。この事業をとおして、地域の PHC システム構築の中で、エイズ予防につながる住民の内発性に基づいた社会的な行動変容が形成されることをめざす。

2．事業報告

2 - 1．村の保健リーダーを対象としたエイズトレーニング

2 - 1 - 1．目的

当会が、これまで「村の保健リーダー」として人材育成をすすめてきた基礎保健トレーニング修了者・伝統助産婦トレーニング修了者・幼稚園教師を対象として、エイズに関する科学的知識、実践的な予防や感染者ケアの基礎知識を提供する。あわせて、エイズ問題対応の視点から地域社会における性行動習慣やエイズ観を共有し、地域において自発的にエイズ問題に関する情報提供・問題提起・助言を行なう役割を果たすよう促す。すなわち、これまで「村の保健リーダー」に期待してきた地域住民に対して地域保健や妊娠・出産・育児に関する情報提供や助言を行なう役割に追加して、エイズ問題についても同様の役割を果たせるよう働きかけていく。

さらに、その後に予定されている小学校でのエイズ啓発ワークショップにおいて、この「村の保健リーダー」が先進的な役割を果たすことも期待している。

2 - 1 - 2 . トレーニングの実施

エイズトレーニングは、以下の日時・会場で、計 6 回・6 日間にわたって実施し、計 252 人が参加した。

	<u>実施日</u>	<u>会場</u>	<u>出席者数</u>
カリティニ区			
ユンブ準区	2005 年 5 月 25 日	ユンブ AIC Church	30 名
キティセ準区	2005 年 5 月 27 日	マルキ AIC Church	47 名
イティコ準区	2005 年 6 月 2 日	カリティニ AIC Church	40 名
ムイ区			
グンギ準区	2005 年 5 月 26 日	カティコ AIC Church	22 名
ゴー準区	2005 年 5 月 31 日	ムニユニ AIC Church	66 名
ギルニ準区	2005 年 6 月 6 日	カロソエニ AIC Church	47 名
		計	252 名

なお、グンギ準区では公衆衛生技官 (Public Health Technician) 、キティセ準区では公衆衛生官 (Public Health Officer) の出席が得られた。

2 - 1 - 3 . トレーニング内容と参加者の反応

トレーニングでは、エイズに関する科学的知識の提供、ならびに地域の現状確認および今後の取り組みを取り扱った。主な内容は、HIV 感染とエイズ発症との明確な区分、HIV 感染プロセスと感染リスクの高い行為として誤認されやすい非感染行為、自発的カウンセリング検査 (VCT)、HIV 感染予防手段とコンドーム実技演習、エイズ発症プロセス、抗レトロウイルス薬 (ARV) の薬効と限界、地域における性行動習慣と社会的禁忌、地域社会への情報伝達手段、子どもの能動的および受動的性交渉による感染リスクからの保護、子どもへのエイズに関する情報伝達のあり方についてである。トレーニング教材は、当会保健専門家であるフランシス・カレリ氏により英語およびカンバ語で独自に作成した。同トレーニングでは参加者の構成から、カンバ語版を使用した。

同地域では、HIV は性交渉のみで感染する、感染は婚外交渉や売春など不道德な行為によって起こるものであるという意識が根強いいため、日常生活の中での性交渉以外の感染経路を詳しく説明することでエイズの「日常性」についての認識を促し、不道德な行為とエイズ感染を短絡的に結び付けて考える誤解と偏見を取り除くことに努めた。予防手段を用いない限りは夫婦間を含むあらゆる性交渉で感染の可能性があることを強調した。性交渉以外の地域の習慣や日常生活の中では、男子割礼・女性性器切除・髭剃り・剃髪・ピアス穿孔・皮膚を傷つける呪術行為などでの刃物の共有、歯ブラシの共有、伝統歯科医による治療、助産行為や事故時の被害者の救助など、感染の可能性のある行動を取り上げて説明を行なった。また、出席者が出産適齢期女性や伝統助産婦であったために、母子感染について多くの質問があがり、母子感染予防について詳しい説明を加えた。参加者から多くあげられた質問は、両親が HIV に感染していても感染していない子どもが生まれる可能性があるのか、またどのようにしたら感染した親から感染していない子どもが生まれるのかという質問であった。対象地域にあるマルキ保健センターで、母子感染予防サービスが開始され、妊婦の HIV 感染検査、感染している場合の妊婦ならびに新生児への ARV の供与が行なわれているため、その情報提供と利用上の助言を行なった。

2 - 1 - 3 - 1 . コンドームによる感染予防

対象地域では、性交渉による感染の予防に関して、住民集会などの公の場での住民の発言としては、禁欲と性交渉を一夫一婦間に限定すべきであるという意見が圧倒的に多いが、一方、トレーニング参加者が共有する地域の性行動に関わる慣習や現状については、実質的に複数の性的パートナーを持つ関係が広範に常態化していることが認識されている。したがって、同地域において、性交渉による HIV 感染の予防手段としてコンドームの適切な使用が不可欠であると考えられる。これらの状況に対して、申請事業を通じてコンドームの普通化をめざして、コンドームの正しい使い方の実演と実技演習を行なった。

トレーニングでは、実技演習のためのコンドームを途中で配布する。受け取りを拒否する参加者も一部見られるが、ファシリテーターによるコンドーム実演が始まると、全員が集中して説明に聞き入っている。その後、参加者にはバナナを配付し、その場で各自コンドーム装着を実践することを促した。一部の参加者が拒否したものの、ほぼ全員がコンドーム装着まで実行した。これまで公式見解としてはコンドームの普及に反対してきた教会関係者や、近代医療を拒絶しているカボノキア信仰に属する人たちの多くも、コンドーム実技演習に参加していた。トレーニングの終わりに、コンドームの追加配付を行ったところ、かなりの数の人が持ち帰っていた。計 6 回のトレーニングに計 252 人が参加したが、実技演習に使用したコンドームを含めて、参加者は、2 個ずつ小袋に再包装した約 1200 個のコンドームを自発的に受け取った。なお、このコンドームは、Family Planning Association of Kenya(ケニア家族計画協会)より無償供与されたものである。

2 - 1 - 3 - 2 . 子どもの保護と情報伝達

地域でのエイズに対する認識について、トレーニング参加のほぼ全グループから、不道德な性交渉のみで感染するという理解があるということが挙げられたことから、地域におけるエイズに関する誤解や恐怖心が、エイズについて話をし、地域全体で考え対処していくことへの障害となっていると考えられる。

子どもにエイズを教えていくことに関して、親子の間で性的話はしにくいという意見が強いなかで、伝統助産婦を始めとした年配の参加者は、子どもを HIV 感染から守るために積極的に子どもと話していくことを他の参加者に促していた。特にギルニ準区では、年配女性の声が大きく、子どもや男性にエイズを伝えていく重要性を主張し、参加者全体の合意形成が行なわれた。

参加者が、同地域におけるエイズの認識、現状分析を行なったところ、多くの参加者から、HIV は不道德な性交渉のみで感染すると信じられている、エイズは呪術による呪いや禁忌に反した罰であると信じられているということが挙げられた。エイズと不道德な性交渉を結びつける傾向が強い状況を反映して、エイズについて話すということは不道德な性については話すことになるため、発話したら不道德であると思われるという意識が、エイズについて地域で話し合っていく上での障害として指摘された。一方で、解決方法として、トレーニングを受けたのだから恥ずかしくがらずに知識を共有していかなければならないといった意見や、様々な感染経路を伝えることでエイズを性の問題としてではなく話をするという意見が参加者から挙げられた。

参加者は知識を共有していく重要性をかなり認識していると思われるものの、比較的若い参加者の間で

は、性に関する言葉を明言することへの恥じらいがあり、きちんとした情報共有がされにくいことが考えられる。また、性の問題が絡んでくるため、女性から男性には話がしにくく、男性にもトレーニングをしてほしいという意見が挙がっていた。

2 - 2 . エイズ啓発ワークショップ : 小学校役員対象ワークショップ

2 - 2 - 1 . ワークショップの目的

小学校でのエイズ啓発ワークショップの実施に向けた合意形成を行なうことを目的にムイ郡全 24 校の校長ならびに学校委員会議長を対象にエイズワークショップを実施した。エイズ教育が正規教育の中に取り入れられており、小学校の学習指導要領には 2003 年に第 1 学年と第 4 学年から、毎年 2 学年ずつ学年ごとに組み込まれ、すべての教科の中でエイズを扱うことが規定されているにもかかわらず、エイズの問題が、不道德な性の問題と強く関連付けられていること、また教員がきちんとした知識を持ち合わせていないことなどが原因となっているためか、学校でエイズについて言及することは極力避けられる傾向にあるようである。このような背景から、まずは、前段階として校長が抱いていると想定される小学校でのエイズ啓発ワークショップの実施に対する不安や反感を軽減するために、エイズに関する基礎知識の共有ならびに当会が計画するエイズ啓発ワークショップの内容、方向性を説明する小学校役員対象ワークショップを開催した。保護者の代表である学校委員会議長の参加も得ることで、校長の独断によってエイズ啓発ワークショップ開催の可否が決定される状況を回避し、保護者からの要望によっても、エイズ啓発ワークショップ開催の提案ができる状況の形成をめざした。学校で啓発ワークショップを実施することの意義として、子どもにエイズの問題を伝えていくことの重要性と、子どもに伝えていく際に、学校だけでなく地域と協力して伝えていく必要性を参加者に伝え、これらについて認識を促すことをめざした。

2 - 2 - 2 . ワークショップの実施

学校役員対象エイズワークショップを以下の通り実施した。

実施日： 2005 年 6 月 3 日

会場： マルキ AIC Church

出席者： 教育官、校長 15 名、議長 17 名（全 24 校中） 計 33 名

2 - 2 - 3 . ワークショップの内容

学校でのエイズ啓発ワークショップの実施を提案し、啓発ワークショップの目的、学校で行なう理由を説明した上で、エイズの基礎知識の共有を行なった。基礎知識の共有に関しては、感染経路、予防、感染者への対応を中心に、基礎情報に加え、特に子どもに関する情報に焦点を当てた情報提供を行なった。

2 - 2 - 4 . ワークショップでの合意事項

ワークショップのなかで、地域のエイズ問題についての認識が共有され、その後のエイズ関連のトレーニングおよび啓発ワークショップとして、以下のものを実施することで合意した。

- ・ 一般教員を対象とした準教育区レベルでのエイズトレーニング
- ・ 教員・保護者・地域住民を対象とした小学校でのエイズ啓発ワークショップ

一般教員を対象としたエイズトレーニングは、小学校でのエイズ啓発ワークショップを実施するための準備段階として実施することで合意した。小学校でのエイズ啓発ワークショップは、校長による独断での要望ではなく、まずは学校内で保護者を含めてワークショップ実施への合意形成をした上で、当会にワークショップの要望書を提出する手順を踏むことで合意した。

2 - 3 . エイズ啓発ワークショップ : 一般教員対象エイズトレーニング

2 - 3 - 1 . トレーニングの目的

この一般教員対象トレーニングは、小学校でのエイズ啓発ワークショップの事前準備として位置づけた。このトレーニングを通して、エイズ教育において教員に求められている役割と現場の実情とを確認するとともに、教員が所属する小学校でエイズ啓発ワークショップを実施する際に、教員が保護者や地域住民に対して先導的役割を果たせるようエイズに関する知識を提供することを目的とした。

なお、小学校教員と保護者・地域住民とを同時に対象とするエイズ啓発ワークショップを実施するにあたり、小学校教員がエイズ問題に関して保護者や地域住民に卓越する知識を持っている自信がなければ、教員のエイズ啓発ワークショップへの積極的は関与が難しくなることや、場合によっては、ワークショップ実施の障害となることが危惧された。この問題を回避するために、当該トレーニング実施を計画した。

2 - 3 - 2 . トレーニングの実施

教員対象トレーニングを以下の通り実施した。

	<u>実施日</u>	<u>会場</u>	<u>出席者数</u>
ムイ準教育区	2005年6月13日	ムイ小学校	8校14名
カリティニ準教育区	2005年6月14日	カリティニ AIC church	6校12名
		計	14校28名

2 - 3 - 3 . トレーニングの内容

同トレーニングでは、前述の村の保健リーダーを対象としたエイズトレーニング内容に加え、学校において子どもたちが感染する危険のある行動に焦点を当てた。子どもたちも HIV 感染の危険に直面しているという現実を共有した上で、学校でのエイズ教育の現状と対応について話し合った。学校でのエイズ教育における障害として、教員数や教員の知識の不足と地域社会のエイズ教育に対する理解不足、エイズ教育が性交渉や不道德を促してしまうという不安、宗教的影響や文化や伝統による規制が指摘された。エイズ問題を子どもに教えていく上で、学校の役割には限界があることから、学校と地域社会が協力して取り組む必要があることが確認された。さらに学校と地域でエイズについて話し合う機会として、教員及び地域住民を対象とした学校でのエイズ啓発ワークショップの実施への肯定的な反応が確認さ

れた。

2 - 4 . エイズ啓発ワークショップ : 小学校におけるエイズ啓発ワークショップ

2 - 4 - 1 . ワークショップの目的

行政による社会サービスが限られている対象地域では、小学校は、地域に最も密に張り巡らされた公的ネットワークであり、教員は地域の重要な知的資源でもある。また、大多数の家庭には、小学校に通う子どもがいる。このことから、小学校は、科学的な根拠のあるメッセージを地域社会に発信する有効な拠点と考えられる。

同ワークショップでは、対象地域で信じられているエイズに関する認識や理解を確認したうえで、エイズに関する標準的な科学知識を紹介すると同時に、エイズを地域の問題として捉え、地域にある現状の中でエイズ問題に取り組んでいけるよう促すことを目的とした。

ムイ郡内の全 24 小学校を対象とし、1~2 校単位で教員と保護者および地域住民を対象とした半日（3 時間）程度の参加型のエイズ啓発ワークショップを開催し、各 50 名程度の参加を予定する。前述の村の保健リーダーを対象としたエイズトレーニングを概括しつつ、エイズに関する正確な基礎知識の伝達とコンドーム実技演習を行なう。そして、子どもたちへのエイズ問題の伝達方法、地域社会のおとなたちの行動変容などについての議論の促進をめざす。

なお、開催地に居住する前述のエイズトレーニング参加者も、リソースパーソンとして貢献することによって、村の保健リーダーとして地域住民から認識される機会とすることも目的とした。

2 - 4 - 2 . ワークショップの実施

ワークショップは学校地域社会の意思を尊重し、学校からの要望書に基づき実施した。ムイ郡の小学校全 23 校のうち、13 校でエイズ啓発ワークショップを実施し、教員 85 名、地域住民 771 名、計 856 名が参加した。実施詳細は以下の通り。

実施日	会場	出席者人数		
		教員	地域住民（うち保健トレーニング修了者）	計
2005 年 7 月 6 日	ガー小学校	2	40 (2)	42
2005 年 7 月 15 日	ルンディ小学校	11	145 (12)	156
2005 年 7 月 16 日	ジア小学校	3	39 (8)	42
2005 年 7 月 27 日	カボコ小学校	6	44 (5)	50
2005 年 8 月 3 日	キモンゴ小学校	6	112 (3)	118
2005 年 10 月 11 日	カテイコ小学校	7	65 (10)	72
2005 年 10 月 12 日	カリコニ小学校	7	40 (5)	47
2005 年 10 月 18 日	キブラ小学校	6	28 (5)	34

2005年10月21日	カリティニ小学校	6	69(11)	75
2005年10月25日	ムニユニ小学校	8	33(9)	41
2005年10月28日	マルキ小学校	10	80(13)	90
2005年10月31日	キビユニ小学校	6	33(3)	39
2006年3月20日	ムワンプニ小学校	7	43(6)	50
計	13校	85名	771(92)名	856名

なお、2005年11月2日に、カバリキ小学校でのエイズ啓発ワークショップが合意されていたが、同校の通学圏を含む地域を対象とする干ばつ対策のための緊急食糧援助が、当日突然に実施されたため、保護者の参加が少なく延期することで合意した。

2-4-3. ワークショップの内容

当該ワークショップは、以下の構成・手順で実施した。

事前グループワーク：教員、女性住民、男性住民で各グループに分かれて、それぞれが日常生活の中でエイズに関してどのような行動・話し合いを行なっているか、どのような障害があるかを話し合い、発表を通じてそれぞれの現状を理解しあう。

基礎知識の共有：当会専門家の講義を通じて、エイズに関する標準的な科学知識を共有し、地域で信じられているエイズに関する理解、認識を再検討する。

グループワーク：事前グループワークで共有した状況を基に、今後地域全体でどのようにエイズの問題に取り組んでいくか、どのように子どもに教えていくかを話し合う。

当該ワークショップでは、前述のエイズトレーニング参加者が、地域の中でエイズの問題に取り組むリソースパーソンとして、一定の役割を果たすことを期待した。グループワークの中で、同リソースパーソンが中心になって話し合いを進めることを促し、さらに参加者の前で発表する機会を通じて、リソースパーソンが地域のエイズ問題への取り組みを主導していくきっかけをつくと同時に、リソースパーソンとして地域住民に認知されることをめざした。また、講義の中で、トレーニングを受けたリソースパーソンが発言できるように、ファシリテーターが誘導する形を採った。所々でトレーニングを受けた幼稚園教師や母親が他の参加者の前で発言する場面が見られたことから、参加者がトレーニングを受けた幼稚園教師や母親たちをリソースパーソンとして認識する機会になったと思われる。

当該ワークショップにおいても、前述の村の保健リーダーを対象としたエイズトレーニングと同様に、バナナを用いてコンドーム装着の実技演習を行なった。

当会が、小学校でのエイズ啓発ワークショップを先行して実施しているヌー郡でワークショップを始めた際は、コンドームの実技演習にはかなり抵抗があり、男女一緒の状態ではほとんど誰も実行しない状況もみられた。これに対し、ムイ郡では、前述の村の保健リーダーを対象としたエイズトレーニングからコンドーム実技演習を扱ってきたこともあり、コンドーム実技演習に際し、学びに来ているのだから男女いっしょに実技演習すべき、男女一緒に使うものなのだから一緒に学ばなければ実際に使えないという意見が参加者からあがるなど、男女同席した中でコンドーム実技演習が実施できる状況が形成され

た。12校の啓発ワークショップを通じて、約6000個のコンドームを配付した。

子どもの保護と子どもへの情報伝達では、子どもの受動的性交渉と能動的性交渉による感染のリスクについて話し合った。受動的性交渉に関しては、子どもが、レイプをはじめ、物や金などの報酬と引き換えに実質的に強制される性交渉に直面している状況に対して、地域の大人としてどのような行動を取るべきか、このようリスクから子どもをどのように守るか話し合った。

子どもの能動的性交渉に関して、性交渉を通じたHIV感染の予防として子どもにコンドームを教えるべきか否かは、地域の中で意見が分かれている状況である。コンドームを教えることは早期の性交渉を承認することになるので教えるべきではないという意見が多く聞かれる一方で、子どもの年齢次第で小学生であってもある程度の年齢に達している子どもには教えるべきという意見もある。ほとんどの参加者が小学生の子どもも性交渉を実際に行なっているという現状を認めており、禁欲を教えるだけでは子どもをHIV感染から守ることができないことにも理解を示している。キモンゴ小学校では子どもにもコンドームを教えるべきだという声が参加者から多くあがり、実際親として子どもにコンドームを教えられるという人が4分の3くらいに上った。一方で、多くの学校では、子どもにもコンドームを教えるべきという意見はあがっても、誰が教えるかという問題については、自身が主体的に関わることを避ける傾向がみられた。いくつかの学校で実施していくうちに、学校によっては、子どもを対象に同様のワークショップを実施してほしいという要望の他、教員から子どもにも教えたいのでワークショップで配布しているモジュールを子供に配布するようにとモジュールをもっていく教員もいくらか見られた。また、マルキ小学校では保健トレーニングを受けた母親たちが子どもにコンドームの正しい使用方法を教えるために学校で実演したいという要望が挙がり、校長から歓迎するというやり取りがあった。これらのその後の経過については、2006年3月までに実際の行動には至っていない。

2 - 5 . コンドーム実演者トレーニング (自主事業)

2 - 5 - 1 . トレーニングの背景

村の保健リーダーを対象としたエイズトレーニングや小学校でのエイズ啓発ワークショップを実施していく中で、地域においてコンドームの使用をはじめトレーニング受講者が住民に対してコンドーム実演を行なうなど、エイズ問題への取り組みが聞かれるようになった。2005年8月当会基礎保健トレーニングを通じて形成された保健グループを訪問し、情報収集を行なった。エイズに関して住民の間で話がされているかはグループや地域によって異なり、議論が進むところがあった一方で、エイズの話になると照れ笑いができるあるいは全く黙ってしまうという状況もしばしば見られた。コンドームの使用に関して、コンドーム使用の必要性への理解が広まってきたと思われる一方で、対象地域ではコンドームの入手が困難であるという状況が聞かれた。2005年11月にコンドームの入手可能性調査、医療機関のエイズサービス調査を実施した。

対象地域であるムイ郡に隣接するヌー郡、グニ郡においては、医療機関において住民が無料で自由にコンドームを入手できるようになっているのに対し、ムイ郡では郡唯一の保健センターであるマルキ保健センターでのみ入手可能ではあるが、看護師に相談して入手するという状況であり、ムイ診療所では一

時的に配付していたが現在ではされていなかった。医療機関にあるコンドームの在庫に関しては、ムイ郡では他の2郡に比べて圧倒的に少なかった。店頭での購入の可能性に関して、ムイ郡では、いくつかの店舗がコンドームを販売してはいるものの、多くの店舗が在庫切れという状況であった。また、医療機関からの入手や店頭での購入は不可能でないにしても、地域でコンドームと不道德を強く結びつける偏見が強いことから、コンドームを入手したことが知られることによって、周囲から不道德者だと思われるのを恐れて入手できないという状況があることが聞かれた。

これらの状況から、特にコンドームの使用に焦点を当てたトレーニングを計画した。

2 - 5 - 1 . トレーニングの概要

当会が、これまで「村の保健リーダー」として人材育成をすすめてきた出産適齢期の一般女性、伝統助産婦、幼稚園教師のうち、幼稚園教師を除く保健トレーニング修了者を対象として、そのうちコンドームの実演者として地域において情報を伝えてゆく意欲のある対象者に、コンドーム使用に関して適切かつ正確な知識を得てもらうことを目的としたトレーニングを実施した。

トレーニングは以下の日程で、6 準区において各 1 日間、計 6 日間で実施された。

	<u>実施日</u>	<u>会場</u>	<u>出席者数</u>
ムイ区			
ギルニ準区	2006 年 3 月 16 日	カロンゾエニ AIC Church	33 名
ゴー準区	2006 年 3 月 17 日	ミャンバニ AIC Church	27 名
グンギ準区	2006 年 3 月 21 日	カティコ New Apostolic Church	18 名
カリティニ区			
イティコ準区	2006 年 3 月 22 日	カリティニ AIC Church	35 名
ユンブ準区	2006 年 3 月 23 日	ユンブ AIC Church	12 名
キティセ準区	2006 年 3 月 24 日	マルキ AIC Church	28 名
		計	153 名

2 - 5 - 2 . トレーニングの目的

本トレーニングは、これまで「村の保健リーダー」として人材育成をすすめてきた出産適齢期の一般女性、伝統助産婦、幼稚園教師のうち、幼稚園教師を除く保健トレーニング修了者を対象とした。幼稚園教師については、その監督者が管轄する小学校の校長であり、小学校ではエイズ教育は行なうが、教員は、生徒たちにコンドームについては言及してはならない、という文書化されていない指導が教育省よりなされている状況を勘案して、現在のところ、幼稚園教師をコンドーム実演者トレーニングへ公式に招待するのは時期尚早と判断して除外した。さらに、今回、トレーニング内容が性に関する問題であり、コンドームに特化していることから、基礎保健トレーニングやエイズトレーニングのような多くの出席を期待することはできないと考えられた。しかし、そのなかで、数人でも重要性を認識して地域に伝えていこうという人がでてきて、彼女たちがさらに専門的知識を備えた保健リーダーとして活動していけるようになるための一段階となることを目指した。その結果、対象者 363 名中、153 名が出席し、積極的かつ真剣なトレーニング参加が得られた。

本トレーニングを通じて、コンドーム使用に関して適切なかつ正確な知識を得て、彼女たちが自身をもって正確な情報とコンドームの正しい使用法を地域に教えていけることをめざした。トレーニングの中で参加者がコンドームにまつわる地域の状況や考えを分析することを通して、情報を地域に広めてゆくうえでの問題を把握し、解決に向けて何が必要かを考えることで、学んだことを実践していけることをめざした。

2 - 5 - 3 . トレーニング内容

トレーニングでは、参加者により、コンドームにまつわる地域の状況分析を行なった。状況分析は、表面的なもので終わらないように、2段階のグループワークの中で、分析を掘り下げていく方法をとった。また、性に関するセンシティブな話題であるため、参加者が自分自身の話をするには抵抗を感じ、現実的な意見が出てきにくいと考えられるため、参加者の考えや経験ではなく、地域一般の状況という形で話し合いを進めた。

状況分析の後に、コンドームの正しい使用方法に関して実技演習を行なった。コンドームの使用方法をパックの開封・コンドームの装着と取外し・処分の各過程に分け、参加者の中から数人が前に出て、それぞれの過程を実演し、その後、すべての参加者がペニスモデルを使用して実践した。この実技演習の中では、誤った使用によって引き起こされる、コンドームが体内に残ったり破けたりするという問題の原因説明を行ない、誤解・不信を取り除くことに務めた。さらに、コンドームにまつわる誤った考えを訂正した。

2 - 5 - 4 . コンドームに関する地域の状況、考え方

コンドームに関して対象地域で一般的にみられる傾向について、今回の参加者による分析では、前回との村の保健リーダーを対象としたエイズトレーニング参加者の分析とは、以下のように異なる点がみられる。前述のエイズトレーニングの中ではコンドームは、不道德な人が使用するものという認識が大半を占めていた。同トレーニング内でも同様の意見は出てきたものの、コンドームは病気の予防や避妊のために有効であるという理解がだいぶ広がっているということが聞かれた。

そのほか、コンドームの使用が不道德を促進するという意見が出ている。これまでのコンドームを使用する性交渉が「現実的ではないもの」「思いもよらないもの」だった状況から、地域社会のなかでコンドームの有効性を知り使用が普及していくと、病気の感染や望まない妊娠の恐れがなくなって、婚外交渉を促すことへの懸念が広がっているとも考えられる。そのため、子どもや配偶者がコンドームの有効性を知ることが望ましいものであるのか、多くの人に葛藤があることが伺える。これらは、要因としては以前からあったものの、コンドームへの理解が進むなかで住民が現実的に直面するようになった新たな課題であるとも言える。

コンドーム使用の重要性への理解が広まっている中、それでも実際の使用に至るまでは障害があることもあげられた。主要なものは、コンドームの入手が困難であること、正しい使用方法を知らないこと、

コンドームの安全性や有効性に十分な信頼がおかれていないこと、コンドームの使用に際し男性の合意を得ることが困難であることが挙げられた。入手が困難であるということに関しては、同トレーニングの中で参加者にコンドームを配布し、要望によって地域の人に配布し、また、配布する際にきちんとした使用方法を教えることを促した。コンドームへの不信の問題は、コンドームの必要性は理解してはいるもののコンドームに関する誤解や誤った情報が流布していることが原因であると考えられる。当該トレーニングを通じて、各トレーニングで 1000 個、計 6000 個のコンドームを配付した。

2 - 5 - 5 . コンドームにまつわる誤解

トレーニングの中で参加者から、コンドームの使用は皮膚病などの病気をもたらす、コンドームは破れてしまう、体内に残ってしまうなどの言説が広範にあるため、コンドームを信頼しない人が多いということが挙げられた。また、コンドームは病気の予防になるという情報が異なった文脈で解釈され、その結果、コンドームの使用はマラリアなどの病気を予防できないから、コンドームの信頼性は低い、というコンドームの機能とは無関係なところで否定的な評価をだす意見が数人の参加者から聞かれた。トレーニングでは、コンドーム装着の実技演習を通じて、正しい使い方を復習するとともにコンドームに関連する誤解の訂正を行なった。さらに、参加者が地域の人に教えていく中で、正しい使い方とともに、地域の人たちも誤解の訂正ができるよう促した。

3 . 今後の課題

コンドームの使用に関して、性交渉を行なおうとする二者の間の合意形成に困難があるとの意見が多く聞かれている。男性が意思決定において力を持っている対象地域においては、コンドーム使用に対する男性の理解が、コンドーム使用の促進に大きな影響をもたらすと考えられる。したがって、エイズ、性感染症を中心とした保健トレーニングを男性対象に実施することを検討する。

子どもにエイズを教えていくことに関して、啓発ワークショップを通じて、教員と地域住民が一緒に考える機会となり、いくつか前向きな意見が出てきてはいるが、実行には移されていないようである。性教育に深く関連してくるエイズ教育に関して、更なるアプローチの検討が必要であると考えられる。

以上